

ストラヴィンスキー：弦楽四重奏のためのコンチェルティーノ

ストラヴィンスキーの新古典主義への先駆となったバレエ音楽《プルチネラ》の直後の作品で、アメリカのフロンザリー四重奏団（Flonzaley Quartet）のリーダーを務めていたアルフレッド・ポーションの依頼により、1920年に作曲された。単一楽章の短い曲だが、ドライかつ洗練された書法で弦楽四重奏が扱われている。

チャイコフスキー：弦楽六重奏曲 《フィレンツェの思い出》

1890年、チャイコフスキーの晩年（50歳）に完成した本作は、かつて過ごしたフィレンツェでの日々を思い返すかのように、ある時は激しい情熱に身を委ね、またある時は優しい旋律に心を委ねて、宗教的なモチーフあり民謡風の旋律ありといったふうに、バラエティに富んだ要素を包括した作品となっている。4楽章構成で、メロディメーカーのチャイコフスキーらしい抒情的な旋律にあふれている。1892年の初演は、本作を献呈されたサンクトペテルブルク室内楽協会のメンバーにより行なわれた。

シェーンベルク：《浄められた夜》

ウィーン生まれのシェーンベルクが、リヒャルト・デーメル同名詩をもとに1899年、弦楽六重奏曲として作曲。その後、作曲家自身により二度にわたって弦楽合奏用に編曲された。単一楽章からなり、30分近い演奏時間を要する。多用される半音階の斬新さや性的なモチーフなどが、1902年の初演時に物議を醸した。

デーメルの詩の大意は次のようになっている。「月夜の林を散策する男女。女が他の男の子を宿したことを告白する。しばし緊張の時間が訪れるが、男はその子を自分たちの子として受け入れることを誓う。夜によって愛が浄化され、二人は抱擁を交わす」。

音楽は大きく5つのパートに分かれ、構成もデーメルの詩の場面に即して進む。言うならば、原詩の情景描写や人物の情感を音で写しとった標題音楽であるが、そうした区分けを超越した名作であることは言を俟たない。